ドーナツと彼女の欠片。

奥田徹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドーナツと彼女の欠片。

【Ｎコード】
Ｎ５４８３Ｗ

【作者名】
奥田徹

【あらすじ】
「何もしないで頂きたい」
待伏せのズングリ男に突き付けられた条件。
「そうして頂けたら奥様は必ず戻って来ます」
自分の置かれた状況を悟り僕は鳥肌が立った。

壊れたボタン。

「条件は一つ、何もしないで頂きたいと言う事でして…」

僕は突然現れたズングリ体型の男に言われたのは、この大まかな「忠告」だった。

「何もしない？」

「はい。奥様は必ず戻って来ます。なので慌てず、安藤様は、いつもと変わらず日々を過ごして頂きたいと言う事でして…」

妻が家を空けたのは昨日からだった。

僕が仕事から帰るといつも部屋にいるはずの妻の姿は無く、慌てて取り込んだであろう洗濯物が部屋の中央で畳まれもせず放置されていた。

部屋の中は真っ暗だったがカーテンは開けたままで、妻は日が暮れる前にこの部屋を出た事を示していた。

妻からの連絡はその日の夜八時過ぎに僕の携帯にかかってきた。

「友達に用事が出来て、寝たきりの叔母さんをちょっとの間、見てほしいって頼まれたの」

その日は泊まりになると言っていたし、このズングリ男が現れるまで、僕はそれを何一つ疑う事無く過ごしていた。

「あの言ってる意味が…」

僕はズングリに聞き返す。

「簡単に言いますと安藤様はある疑いを一つかけられています。その疑いが晴れるまでの間、奥様を一時お預かりさせて頂くと言う…」

僕は自分の身に一番起きて欲しくない事を目の当たりにしてるのを察し、瞬時に鳥肌が立つのを感じた。

「つまり、脅迫ですよね？」
「いえいえ、そのような物騒な事は何一つ存在していません。」
ズングリは慌てて否定した、続けて
「ただ、少しの間だけ、何もせず時間を過ごして頂くだけでして我々としましても、大事に至らない様、こうして安藤様の前に現れた次第です。」
と、如何にもこれは親切な行為ですとでも言いたそうな表情をしてズングリは言った。
「妻は無事なんですね？」
「ええ、それはもう、心の底から保証致します。」

マンション近くの小さな公園。ズングリはここで僕が帰ってくるのを待っていた。僕はズングリから目を反らし、遊具から伸びる影を何となく見詰めた。
「期間は？」
「今日から三日間です。三日後に奥様は必ず戻ってきます。勿論、安藤様の疑いが晴れるのを前提としてお話させて頂いてますが…」
「…質問しても良いですか？」
「ええ、なんなりと」
「まず、その疑いとは何なのか？妻が無事である証拠、そして貴方達は信用出来る方なのか？」
「なるほど…当然ですね。…そうですね、もし疑いが晴れた場合、逆に知ってしまった事で、安藤様が危険に晒される可能性がありますの。それと、私共と雇い主の間に幾つかの下請けを挟んでますので、実際、安藤様の疑いについては私自身も知らされてはいません。…ただ」
「ただ？」
「ただ、私どもの依頼者を考えますと、かなり力を持った組織です。そこへ依頼してくる殆どが、世の中を陰で動かす力を持った方達です。」

「世の中を陰で…？」
「ええ、知らない方が得策かと…」
「いや、でも妻は誘拐されてる訳ですよね？」
「いえ、それは誤解です。奥様は必ず戻って来ます。」
「妻も帰ってくる。僕には何もせず過ごせと言う。だったらわざわざあなたが現れる必要は無いんじゃないですか？」
「…私の役割はあなたに危険が及ばないように忠告する事です。誰も損はしません。何も起きなければ私の事などすぐ忘れて頂けたらそれで全て済みます。ただ、私が事前にこうやって、安藤様に伝えたと言う事実が一つあれば、安心するお方がおります。そうして私は家賃を払ったり、食事をしたり、寝る前に小さな溜息を吐く事が出来ます。」
ズングリ男の言葉遣いはソフトのようで、所々に脅迫めいた響きがあった。
「…所々気になる言い方をされますね」
「ああ、すみません。よく指摘されるのですが…はい…」
「……」
「ではこうしましょう。明日、奥様から安藤様へ電話をかけて頂くという事で？」
「電話？」
「奥様の無事も確認出来る事ですし…」
「そんな事出来るんですか？」
「ええ、それが安藤様からの条件と言う事にさせて頂ければ…」
「……」
「奥様も戻って来ます。…勿論、安藤様がおかしな行動をとらなければと言う事になりますが…」
この男は所々脅迫めいた発言を被せてくる。
「あ、また変な言い方を…」
僕はまだ自分が置かれた状況をうまく把握出来ずにいた。ズングリはそれを見越した様な目つきをして、

「それでは、その様な形で進めさせて頂きます…」
と言うと、深々とお辞儀をして背中を向け歩きだした。
「あ、ちょっと…」
呼び止めると、ズングリは立ち止まり、僕に顔を向けると
「下請けの外回りは辛いですなぁ…お互い」
と言ってニコリと笑った。その笑顔は焦点が合ってない寝起きの気分を誘発する様に、僕の居心地をふらつかせた。
「では…」
背が低く、頭だけバランス悪く大きなシルエットを眺めながら、僕はどうしたら良いのか戸惑っていた。

ふと、手を入れたズボンのポケットから、昨日の朝、妻に渡された壊れたボタンが出てきた。
仕事帰りに駅前デパートの洋裁売り場でこれと同じボタンを買ってきてと渡されていた。僕はその事をすっかり忘れていた
糸を通す後ろの金具部分が欠け、ボタンは既にその役割を終えていた。

「……」

気がつくと、ズングリの姿は消えていた。

取りあえず、三日以内に忘れず買っておかないとなと思い、
僕は壊れたボタンをポケットに入れ、
妻のいない部屋へ向かった…。

壊れたボタン。（後書き）

短期の連載です。よろしくです。

クレーム処理。

ズングリ男が言うように、僕は特別な事（例えば妻を捜すとか、警察に届けるとか）をせず、
いつものように朝、職場に出勤し仕事をする事にした。

勿論、妻の身に何か良くない事が起きていないか心配だったが、
だからと言って闇雲に動く事は危険な気がしたし、動くにしても、
ズングリ男が約束した妻の電話が来なかった場合の方が良いのではないかと思った。

僕は荻窪のマンションの一室にある職場に出勤すると、タイムカードを押し、
ホワイトボードに今日の予定を書き、事務所を出た。

僕の仕事は小さなリサーチ会社で、何処かの会社から依頼を受けて、その裏取りをするのが主な仕事。
例えば、東関東の二十代前半の携帯電話普及率を何処かの会社が調べた資料を元に道端へ出て、
二十代前半らしき人に声を掛け、その資料に偽りは無いか確かめたり、
変わった仕事だとデパート等に上がったクレームの相手の怒り具合を確かめに行く等もある。

今回任されているのはその変わったタイプの仕事だった。

あるデパートの洋菓子売場のドーナツ担当者から、そのデパートのクレーム担当に、
「常時ドーナツの大量注文をされていたお客が突然、注文を打ち切

ったので、その理由を調べて欲しい」
と依頼。そのリサーチをうちの元請けの大手リサーチ会社に依頼が来て、
その下請けで僕が働く事務所に実務が回ってきた。

誰かがドーナツを買わないだけで大騒ぎだ。
お節介な事だと思いつつも、僕には何も言う権利は無い。
搾取され矢面に立ち、失敗すると他と変えられ、仕事を奪われると脅されながら、
淡々と指令を実行する。

僕の意見など必要無い。
大事なのは業務を確実に処理した実績と証拠のみだった。

荻窪から電車を何度か乗り換え、二時間程乗り、四十分近く歩いた場所に彼は住んでいた。
彼とは、ドーナツの大量注文を止めた、大場と言う四十代中盤の男性で、
近所からは変人扱いされ、オバケとあだ名が付けられていた。
三回目に会った時、彼は額に大きなガーゼをあて、
「近所のガキが俺が出て来ると石を投げる。石が当たるとゲラゲラ笑って走っていく。意味が解らない。」
と不機嫌そうに言った。

僕は彼の元に五日程通っている。

ただっ広い田んぼ道を歩き、抜けると小さな林があり、
人が一人通れる程の幅の坂道の先が行き止まりになっている。
その行き止まりが高台になっていて、オバケはいつもそこにいた。

高台の上に胡座をかき、釣竿を置き、糸をたらしている。
糸の先には何故かドーナツがついていた。
オバケは退屈そうに、そのドーナツが風に揺れるのをジッと眺めていた。

「あの…何してるんですか？」
「見りゃ解るだろ…釣りだよ」
初めてオバケを見た日、そんな会話をした。
一瞬たじろいだが、お客を前にした時は、まず目の前の人物を受け入れる事に勤めるのが鉄則。
「…え、あ、釣れますか？」
「…アホか？」
「ハイ？」
「空中にドーナツぶら下げて何が釣れるんだよ」
「…ハァ…」
訳が解らない。しかし、そんな事実すら受け止め、実務に当たる。
「あ、私、西急デパートの食品売り場、洋菓子担当クレーム係様からの代理でお伺いしました安藤と申します。」
名刺を差し出すがオバケはジッとドーナツを眺めたままで、それに気付かない。
「デパート？」
「はい、大場様からドーナツに関するクレームがあったとの事で、私どもとしましても深刻に今回の事は受け止めようと…」
「別にクレームなんか言ってない。ただ注文するのを止めただけだ」
「そうでしたか、それは大変失礼を…私どもとしましては、参考までに、その理由をお聞かせ頂けたらと思いまして、本日はお忙しいとはおもいますが、どうかお時間を頂けないかと…」
「……」
「あの…」

「お前、俺を馬鹿だと思ってるだろ？」
「いえ、とんでもありません」
オバケはバスケットに入ったドーナツを一つ取り出し、僕の方に差し出す。
「ほれ」
「あ、誠に申し訳ありませんが、只今、私、勤務中でして…」
「うるせーな、受け取れ、ほれ」
「あ、ありがとうございます」
僕はドーナツを受け取る。
ドーナツは手作りで、コンガリとしたキツネ色、形も良く、表面は程よい固さだった。よく出来ている。
オバケも自分用に一つ取り出すと顔の前にドーナツを掲げ
「何か見えるか？」
「え？何がですか？」
オバケは一気に一口でドーナツを食べた。
そしてモグモグとよく噛みながら、僕の顔ををジッと見た。
「あ、いただきます！」
ドーナツを食べると表面のカリッとした食感の先にモチッとした生地の柔らかさと
砂糖の甘さが口に広がった。
オバケは食べきってフーッと一息つくと、遠い目をして
座ってる先の景色を眺めた。
「ホラ見てみい、世界が変わって見える」
「え？」
僕はオバケの言葉につられ、景色を見た。
「…」
美しかった。
甘さに感化されたのか、たまたま視野が広がったのか、
高台から見下ろす林の先に広がる田んぼの緑の揺れ、圧倒的な雲が空の高さに挑戦し、

風が緩やかに僕の周りを泳いだ。
僕はドーナツを食べ終えると、フーッと一息ついた。
美味しい物を食べると、一瞬で世界が変わる。
昔、そんな例えを聞いた気がする。
それはあくまで例えで、実際は同じ場所、通常の時間軸の中、
僕達は引力を感じ、些細な変化にも鈍感な自分にウンザリする。

「解るか？」
「はい。」
オバケは僕の顔を見て、「どうだかな」と言いたげな表情を見せ、
再び釣竿の先のドーナツに目をやった。

オバケが、釣竿のドーナツについて話してくれたのは四回目に訪問
した時だった。
今にして思えば、それが、妻が消えた理由と繋がっていたなんて、
その時の僕は考えもしなかった。

クレーム処理。（後書き）

二話目が結構長かったすな（＜＿＞）
三話もよろしくです＼（＾ー＾）／

独り占めの後悔。

前回訪問した四回目。
オバケは相変わらず通ってくる僕の顔を見て、呆れた表情を浮かべ、そして笑った。
オバケも実際、言いたい事があるのだろう。
誰だって石を投げられ、陰口を言われ、話し相手もいないまま高台からドーナツが風に揺れるのを眺める毎日が健全だとは思っていない。
勿論、オバケ本人だって。
訪問を重ねる事に寡黙さは減り、オバケとの距離が縮まってきたのを感じた。
僕自身、ここへ来て、風に揺れるドーナツを眺め過ごす事に心地好さの様なものを感じていたし、オバケと過ごす緩やかな時間は嫌いじゃなかった。

「例えば…あんたにもないかな？ホラ、よく解らないが気になってしょうがない場所とか、凄く重要な事を忘れてる気がしてならないとか…自分の居心地が悪い状態。つまり違和感だな。」
「…はぁ。違和感ですか。デジャヴュみたいなものですかね？」
僕の答えを聞いて、オバケは一瞬口をへの字に曲げ、もどかしさを顔に浮かべながら、
「ん～、なら、お前さんが聞きたいドーナツの話で例えてみよう…」
オバケはそう言うと、言葉を止め、釣り糸の先のドーナツを眺めながら、息を止め、全身に力を込め、眉間にシワを寄せた。きっと話しの内容をしっかりと咀嚼しているのだろう。
そして、フッと一息吐くと、ゆっくりとした口調で話しはじめた。
「…妻と二人のんびりと暮らす男がいた。ごく普通の、道端ですれ

違ってもすぐ忘れてしまうような、ごくごく平凡な男だ。」
「はい」
話しを始めたオバケから、一瞬空気がざわめくのを感じた。
緊張が声を少し震わせ、変な間でゴクリと唾を飲み込んだ。
「ある日男は、妻と二人で食べようとドーナツを買って家に帰った。でも、妻は留守。男は腹が減ってたので、その買ってきたドーナツを一つ食べた。一つ食べたら止まらなくなり、一つ、また一つ…気がついたら妻の分も含め、全てたいらげてしまった。満足した男はそのままスヤスヤと寝てしまった。…どうなったと思う？」
「え？どうなった？？…怒られたんですかね、奥さんに…」
「目が覚めたら世界が変わってたんだ」
「世界が変わる？」
「妻は存在すらしていない世界になっていた」
「え？…どういう事ですか？」
「どうもこうもない…男はその別世界で、前の世界を引きずりながら生きていく事になった。男はうろたえ、正確に自分に起きた事を伝えようと努力するが、誰一人まともに聴いてくれる奴はいなかった。逆に周りからは、あいつは頭がおかしいと誰も近づかなくなっていった…」
そこまで話すと、オバケは話しを止め、フーっと一度吐き捨てるように溜息をついた。
「え…で、どうなるんですか？」
「…それだけだ。どうにもならん。」
「どうにもって…」
「どうにもならん男の話だ。…つまり、くれぐれもドーナツを独り占めしちゃイカンって話だ。後悔しか残らなくなる…ホレ」
と、ドーナツを差し出す。
「あ、じゃあお言葉に甘えて」
僕はオバケが用意した手作りのドーナツを受け取り、頬張った。
「でも、何で世界が変わったんですかね？」

「さあ…だが、世の中、ちょっと体を横に捻っただけで、車に轢かれる奴もいれば、何にも起きず無傷な奴もいる。ほんのちょっとの出来事で、今後の見る目の前の世界が変わっちまうものなんだ。…その男、つまり俺にとってはそれがドーナツだった訳だ。」
「え？」
オバケは確かに、「俺」の話と言った。
釣竿の先、ドーナツが揺れている。
オバケは自らの言葉に落ち込んだかの様に、寂しげな表情を浮かべ、ドーナツを眺めている。
その日は、その後、オバケは殆ど口を開かなかった。

僕は事務所に戻り、比較的、正確にこの事例を報告書にまとめ、上司に提出した。そしたら案の定怒られた。
「なんだこれは？そこの大場さん、特に大口だったから、また発注来るようにって、調査依頼だろ？…なんだそれ、ドーナツで釣り？」
「ええ」
「本当でも提出出来ないよ、そんな報告書」
「とりあえず、もう御自身でドーナツを作っていらっしゃるから、いらないって事でいいのでは？」
「それじゃ金貰えないだろ～、猫のお使いじゃないんだから、クライアントが満足するようにさ、味が変わっただとか、最もらしいの聞き出して…で、ちゃんと録音しといてさ。依頼がまた来るように」
「注文は無理っぽいんじゃないすかね…」
「そこら辺は任すから。何か、形作ってさ、一週間は引っ張っても依頼料出そうだから…実績、実績という感じで」
「まだやるんすか…」
「出来るだけ引っ張る。で、それに見合った何かを形にしろ。オーケー？」
「…オーケーサー」

「ハハン」

そして、その日、妻が消え、ズングリ男が現れ「何もするな」と言った。
世の中、もしくは僕の周りだけ少しずつ、何かがズレはじめてる気がした。

僕はその晩、無駄に広く感じるアパートで一人、電気を消し、窓を開け月明かりを浴びながら、「オバケは雨の日もあそこに座りドーナツを眺めるのだろうか？」と、考えた。そんな事はどうでも良いと思えば思う程、気になり、気になって胸騒ぎがして、やり切れなくなり、涙が出て止まらなくなった。
拭っても拭っても止まらない涙に戸惑い、
そして、妻の不在を心の底から意識した。

「また、来たのか？」
オバケは僕の顔を見ると、呆れた様に言い微笑んだ。
「ええ、気になる事だらけになってしまって…」

そしてこの日、実際に僕は「気になる事」に遭遇する事になる。

独り占めの後悔。（後書き）

二話目で処理するつもりのエピソードが四話目までまたがりそうです…（＜＿＞）難しい。

一瞬、繋がる。（前書き）

すみません、暴走が始まってます。書きながら修正できれば（一・一；）

一瞬、繋がる。

人の話を聞く時、僕はいつも「基本的には信じる」事にしている。
何故そうする様になったのか？
きっかけは些細な事で、妻とまだ結婚する前につまらない事で喧嘩になり、
「出来るだけ嘘はつかないで、私も努力するから」
と、約束させられた。
約束をしながら、そんな事はきっと無理だろうと思っていた。
しかし実際、僕が嘘をついているとか以前に（捉え方によっては実際に起きた事でも表現の仕方で嘘になる）何故僕は嘘をつかれなければいけないのだろう？と考えるようになった。

その疑問は日増しに大きくなり、それと比例して気持ちが楽になった気がした。

嘘を見抜くだけでは何も進まない。相手が謝るか、また嘘をつくだけだ。大事なのは、何故嘘を言わないといけなかったのか？その中の真実と向き合う事の様な気がする。

僕はオバケの話も基本的に信じた。
それは非現実的で、荒唐無稽な話だったが、その言葉の響きは真実味と切実さが確実に存在していた。

「ドーナツを食べたら世界が変わっていた。誰も信じない。だが、

実際体験している俺にとってはとんでもないミステリーだ。」
オバケは前日の話の続きを僕に聞かせてくれた。
それは、昨日僕に話した事から真実の実感を新たに手に入れたように、饒舌だった。

「入れ歯を無くしてジャングルに探しに行くような話だがな」
「ええ」
「俺がこの世界に迷い込んだのはドーナツを独り占めしたからだ。少なくともそれが発端なのは間違いない。きっとドーナツと世界の間に何か通路の様な物があるんじゃないかと俺は考えた。俺は一刻も早く、こんなバカ扱いされる世界を抜け出し妻に会いたい。あの平凡な生活が心の底から愛しい。…だがな、時々、核心が持てなくなる。」
「核心ですか？」
「何も変わらない。記憶はあるが、本当かどうかその証拠が無いだけに薄れていく。それは本当に俺を孤独にする。俺はタダの馬鹿なのかもしれないと。俺のミステリーなど、思春期の家出、朝の老人の体操、休日の家族の日向ぼっことなんら変わらないのかもしれない。気まぐれや、自意識や、思い込みや、迷子のように…ま、つまりお前さんとこのドーナツが悪い訳じゃないんだ。どうしたら繋がるのか。色々な方法を試しているだけなんだ。」
「繋がる…ですか」
「つまり、世の中には様々な選択肢がある。何かを選ぶ事によって、何かの可能性は消える。と同時に、どこかで未来が修正されている。最初は馴染めないが、そのうち忘れてなんでもなくなる…残酷な話だ。」
「えー、あー、と言うと？」
「俺には妻がいた。しかし、今いるこの世界では俺に妻がいた事実など無い事になっている。でも俺は忘れていない…そういう事だ」
「…そうだとすると、」

「……」
「残酷ですね。」
「まことに…。おたくのドーナツは美味い。種類も多いし、飽きも来ない。宅配もするし値段も安い。俺が作るドーナツよりよっぽど美味い。ただ」
「ただ？」
「それで世界は変わるのか？」
「世界ですか？」
「おたくの様なドーナツ。レストランのドーナツ。パン屋、うちで作ったドーナツ。大きな枠に一括りにして分類する。例えばニュートンは木から落ちるリンゴを見て重力を発見した。だが人間誰しもがリンゴが落ちてきただけで何か発見できる訳ではない。どんな鍵を使っても扉が開いてしまっては鍵なんか必要ないんだ。その鍵穴には一つの形でしか扉が開かない。」
「…つまり、うちのドーナツが気に入らない訳ではないという事でしょうか？」
「まぁ…そうだな」
「では、うちのドーナツを注文して頂く事もあるという事でしょうか？」
「うむ…そうだな」
「ありがとうございます。」
オバケは、僕の顔をジッと見るとフンッと鼻息を吐き捨て、ドーナツに目を移した。真剣に話している所を、商売の話で腰を折られた様な形になり、気を落としたのだろう。僕がいけない。
「すみません。」
「いや、いい。…誰も俺の話など真剣に聞かない。」
例えば僕が、オバケの立場であったなら…
「大場様、雨の日もここに来るのですか？」
「来る。」
「傘は差しますか？」

「差す。」
僕はオバケが雨の日、ここに一人座って、傘を差し釣糸の先のドーナツを眺める姿を想像した。
それは、片時も奥さんを忘れず、今の世界を全て放棄してでも手に入れたい、「何でもない日々」。
オバケに身寄りは無いと言う。親兄弟は亡くなっていて、その遺産やら保険金やらが全て彼の物になっているらしい。一生働かなくていいぐらいの額を彼は所有していた。その状態も彼を世間から遠ざける一因になっていたし、それに不随してあらぬ疑いをかけられたり、陰口を言われたりした。人殺し、人で無し、ケチ、勿論それはオバケを苦しめた。苦しめたが、誰もそれを理解しなかった。彼は黙ってそれを堪え、あの日ドーナツを一人で食べた事を悔やみ続けた。
「金なんかいらない。ただ、あのささやかな時間に俺を戻してくれ。お願いだから…」
彼はそう心に願い、「別の世界」にいる奥さんに向けドーナツを釣るし、そのドーナツを眺めながら自らもドーナツを食べ続けた。
ありとあらゆるものに馬鹿にされながら…。

「一度だけだ…」
「はい？」
「一度だけ、釣るした先のドーナツが食べた後のように欠けた事があった。」
「欠けたんですか？」
「ああ、それからずっとこうしてる。もう四年だ。」
「四年間毎日ですか…」
「もしかしたら、カラスがつついたのかもしれない、風が強く吹いてドーナツの一部が飛ばされたのかもしれない。だけど、もし妻がいる世界と一瞬でも繋がったのであれば…もう、それを信じるしかない。それに一生賭けても後悔は無い」

オバケは言葉を口にしながら、それらを噛み締め、決意しているように思えた。
孤独を覚悟する程大切な想い。

「あんた結婚は？」
「はい、してます。」
「子供は？」
「いません」
「子供がいてもおかしくない」
「はい。」
そう聞くとオバケは、釣竿を引き寄せ、釣り糸の先のドーナツを引き抜き、
「やってみろ。見た事の無いあんたの娘があっちの世界でドーナツを食べたがってるかもしれない。」
と、釣竿を僕へ差し出した。
僕はそれと、新たなドーナツを受け取ると、釣り糸に巻き付け、オバケのやっていた様に空中へドーナツを釣りした。
「こんな感じで…」
「そうだ。」
そう言うと、オバケは満足げに笑い、バタンと寝っ転がってしまった。

僕はドーナツを眺めた。
心地好い風が通り抜け、ヒョイ、ヒョイと揺れた。
悪くない。
奥の雲がゆっくりと流れ、日差しが丁度良く気持ちいい。
暫く眺め、新たなドーナツを手にして、ズングリ男の事、そして妻の事を考えた。

僕も妻が消えたら同じ様に探すのだろうか？
妻が消えたら…ズングリ男は必ず帰ってくると言った。今日中に電話もさせると言った。いったい何が起きていて、僕は何を疑われているのだろう。
妻がいない世界を僕は想像出来なかった。それより出会った日の事。結婚を決意した日。子供を諦めた事。ささやかな旅行。過ごしてきた時間が愛しく、そして早く妻に再会したいと思えてきた。
そんな事を考え、ドーナツを食べた。

と、ガバッと起き上がるオバケ、それと同時に僕をキッと見つめ
「え？…はい？」
「今、一瞬…」
「……」
「何か考えたか？」
「え？」
「今、あんたドーナツ食って何考えた？」
「いや、何も…あ」
「何だ？！」
「妻の事を…」
「妻？…奥さん？」
「はい…」
「本当にいるのか？奥さんは？」
「え、はい…どういう事でしょうか？」「見てみい」
と、釣り竿の先を見ろと促すオバケ
「へ？」
釣り竿の先、揺れてるドーナツ。そして左隅が少し欠けている。
食べた後のように
「え？」

その後、僕は４時間程ドーナツを食べ、眺めていたが何も起きなかった。

「明日、もう一度来てくれ。そしたらドーナツの注文をしてもいい」
「本当ですか？はい、ありがとうございます！」
「あと、奥さん事、気をつけた方がいいぞ」
「え？…それはどういう…」
「解らん…ただ心配なだけだ」
「はい、ありがとうございます」

僕はオバケと明日の約束を取り付けた。少し残業になり、その日はいつもより遅めに帰宅した。

そして、簡単に食事を済ませた夜九時過ぎに携帯電話が鳴った。

妻からだった。

一瞬、繋がる。（後書き）

やっとこさ話が進み出したかしら（＜＿＞）
華麗にスパッと早く終わらせたい。前回までの色々直したくなる。
連載って難しいすな…。

妻の電話。

「はい！もしもし」
「何か今、地震なかった？」
妻は唐突に地震の話から始めた。
「え？地震？感じなかったよ。今どこ？」
「ごめんなさい、連絡が遅れて、今、沼津にいるの。色々あって」
「沼津？どうして？」
「友達に頼まれて、ちょっとの間、体の具合が悪い友達の叔母さんの看病を頼まれたんだけどね、その叔母さんがいなくなっちゃって、今日、沼津で見つかったって…」

「無事だったの？」
「無事よ。普通に観光してたって。」
「それで、二日も連絡できなかったの？」
「本当、ごめんなさい。スゴく、沢山の偶然が重なって電話しようと思ったら電池が切れてたり、公衆電話の電源が外れてたり、私もバタバタしてて」
妻の声は普段と変わり無く、何かを隠している様な響きも無かった。きっと、本当の事なのだろう。

「…随分、会ってない気がする。まるで君が別世界に行っちゃったみたいだ」
僕がそう言うと、一瞬、間が空き、貴方がそんな事言うなんて珍しいとでも言いたげにクスッと笑い声が聞こえた。
「大丈夫。ちゃんといるから。明日には帰れると思う。それまで」
「ずんぐりとした男が訪ねてきたよ。君が今日、連絡すると言てった」

「え？ずんぐり？誰かしら」
「何かしら変な目に遭ってない？」
「変な事？」
「いや、いい。何もなければ」
「あ、ごめん！そろそろ」
「あ、うん」
「はいはーい」

電話が切れ、部屋にはダイニングの冷蔵庫のブーンと言う音だけが申し訳なさ気に音をたてていた。

妻はズングリ男を知らなかった。特に酷い目にあってる素振りも無かった。
しかし、実際にズングリ男が言うように妻からちゃんと電話はかかってきた。

一体何が起きているのだろう。全ては明日。
明日には妻が帰ってくる。
僕はオバケの様に、一人この世界に残されないで済む。
それで良いじゃないか。
心からそう思えた。
妻の声を聞き、何か凍えていた物が温かいスープでも口にしたかの様な温もりを感じていた。

薄明かりの中、窓を開け月の前を通過する雲を眺めていたら、日付が代わっていた。僕はベッドに潜り込み、目を閉じたが寝付けなかった。

結婚して15年が経ち、当たり前の様に感じていた妻の存在を、不在によって実感した気がする。
僕達には子供がいなかったので、休日は二人でよく出掛けたし、お互いの存在を確認する事は当たり前のようであり、日常だった。
「楽しかったんだな…」
僕はそう呟き、またその日々に戻れる事に、少し緊張しつつ、胸が高鳴ってもいた。
それは僕にとって新たな発見だった。
明日が楽しみと言う感覚が。

朝が来て、僕はいつもの様に事務所に寄った後、オバケの元へ向かった。

高台の上、釣竿とドーナツが見えるが、オバケの姿が見えない。
何やら子供数人の声がして僕は胸騒ぎを感じ、高台へ向け走った。

高台に着くとオバケが大の字で地面に寝転がっているように見えた。
性格に言えば倒れていた。僕は息を飲み、

「大場さん！」
慌てて駆け寄り、オバケが息をしているか確認した。
シューっとボロ屋の隙間風の様な音が口から聞こえ
「え、あ、息！」
僕はオバケの胸の中央に両手の平を当て、必死で心臓マッサージをした。
「ハア、ハア、ハア、ハア…」
全身の力を手の平に集め、無我夢中で何度も胸を押した。
するとオバケの顔が赤く血の気が出てきて、
「プハッ…ゲッ、ゴボゴホ…」

「来たっ！」
オバケが咳をし、体がよじれた。
僕はのけ反り、尻餅をついた。
「ハア、ハア、ハア…」
と、草村からガサッと人影が動く音を耳にし、
「待て！」
僕は何も考える隙も無く、オバケの首を絞めたであろう犯人を追い掛けた！

それは、中学生ぐらいの二人組で
「ヤベッ、そっち行け！」
と、二手に別れ僕なんかが追いつけない速さで突っ走って行った。

僕は息が続かず、その場に倒れ込むと、大の字になった。
空を眺めながら、早い鼓動と息の乱れを整えた。
「ハアハアハアハア…」
雲が横から見たミルフィーユの様に見えた。
そうだオバケを…。
僕は一分程休んだ後、立ち上がり、再び高台へと向かった。
高台に戻るとオバケの姿は消えていた。
釣竿の先のドーナツと共に。

「え…なに？」
僕は途方に暮れ、暫くその場に立ち尽くした。

妻の電話。（後書き）

もうちっと続きます。
よろしくですｍ（　）ｍ

別の世界。

オバケが消えた高台で呆然としていた時、事務所からの電話が鳴った。

「お前どこにいる？」
「例のドーナツの案件で…」
「ドーナツ？何言ってるの？赤羽は？」
「赤羽？」
「…たく、良いから戻れ、すぐに」

僕は上司に戻れと言われ、頭の中の混乱を整理する暇もなく事務所へ足を向けた。

トボトボと戻る道程の中、オバケとドーナツの関係について考えていた。
あの中学生ぐらいの若者はオバケの首を絞め、殺してしまう寸前だった。以前、オバケは近所の子供に石を投げられた話をしていた。
そんな悪戯がエスカレートした結果、あんな悲惨な光景になってしまったのだろうか？
オバケは確かに息を吹き返した。それは確認した。けれどドーナツと一緒に姿を消してしまった。

「世界が繋がったのだろうか？」

オバケが言っていた通り、ドーナツをあちらの世界の奥さんと共有すべく、費やした時間がもし報われたのだとしたらそれは素晴らしい事だと思った。
そうだと良いなと思った。

事務所に戻ると、上司に呼ばれ、事情徴収が始まった。
「で、どういう事？」
「あ、はい。大場様とドーナツに関しては…」
「ドーナツ？さっき電話でも言ってたな」
「ええ、何か？」
「赤羽のアパート騒音の調査じゃなかった？今日は？」
「え？そんな話は…初耳で…」

事務所では聞いた事も無い案件を言われ、それに向かわなかった理由を聞かれ、責められた。僕は何度かドーナツのクレーム処理の話に戻そうと試みるが、
「そんな案件は存在しない！」
適当な言い訳をするなと怒鳴られた。
不思議な事に机に置いてあったハズの資料も全て紛失していた。

「…すみませんでした。」
「まあ、先方には週明けに日にちズラして頂いたから…頼むよ。お父さん」
「…え、お父さん…？」
「安藤ちゃん、そこもしらばっくれる？」
「はい？」
「早く帰らないと夏希ちゃん部活終って帰ってくる時間じゃないの？」
「…夏希？」
「おいおい、本当に大丈夫かよ」

僕はドーナツで釣りをするオバケの後ろ姿が一瞬頭を過ぎり、そしてオバケの言葉を思い出した。

「見た事の無いあんたの娘があっちの世界でドーナツを食べたがってるかもしれない。」

ゾクッと背筋に寒気が襲った。
僕は念の為、恐る恐る上司に確認する。
「ちなみに…夏希って、僕の娘の？」
「ああ、娘の…他にいるのか？」
「娘！」
僕は自分で聞いておきながら、その場で立ち上がり、声を張り上げていた。

「なんだ、なんだ？」
「すみません、色々新鮮でして…」

5時ちょっと過ぎ。ほぼ定時。この仕事を始めてからこんなに早く退勤した事は今まで一度も無かった。だけど他の従業員も帰る僕を見て特に怪訝そうな表情は浮かべておらず、僕が定時に上がる事は当たり前の様にさえ感じられた。

事務所を出て荻窪駅のホームで電車を待ちながらジワジワと事の重大さを咀嚼した。
僕に娘がいる世界…。娘、それとオバケの案件が存在していない以外、今の僕には大した情報も無く、動揺しつつも、実際に現状を正しく理解していたとは言えなかった。
いつもの駅のいつものホーム、いつもと変わらない電車が到着した。
僕はそれに乗り、いつもと違うかもしれない家に向かった。

アパートはいつもと変わらず存在していた。
扉の鍵穴に鍵を差し込んで、…回らない。
「へ？」
内心、かなり焦りながら素知らぬ顔を装い、何度か鍵を差し直し挑戦してみたがやはり鍵は回らない。
誰かが歩いて来るのが見えたので、僕は少し扉から離れ、その人物が通り過ぎるのを待とうとしたら、…その男が扉を開け部屋に入っていった。
「……！」
僕は唖然として、立ち尽くしたが、
たぶん、この部屋に僕は今住んでいない…のだろう。きっと。どうやら違和感はジワリジワリと僕を追い詰め始めたのが解った。
しかし、じゃあ、どうしたら良いのさ。
僕は半ば混乱し取り乱す心を何とか腹の底に抱え、ズングリ男と会話した公園に行き、ブランコに乗りながら夕焼けを浴びた。
「信じられないな…だけど、どうしよう…」
孤独も重なり、実感を得るため口に出して呟いてみた。
そんな時だった。
「お父さん？」
背中で誰かが誰かのお父さんを呼んでいた。
「どうしたの？」
ん？僕は振り向き、その声に顔を向けた。

そこに立っている制服姿の女子高生は明らかに僕を見つめ問い掛けていた。
影が後ろへ長く伸びていた。

僕はまさかと思いつつ、念の為問いかけてみた。
「…夏希？」
「ん、なに？」

女子高生はクリッとした目を開き、僕の様子を伺った。
僕はハッと息を呑み、後ろへのけ反り、その反動でブランコから落ちた。

それを見て、プッと吹き彼女は笑った。
「何してるの～」

それが娘と僕の初対面だった…。

別の世界。（後書き）

そして続きます…。

迷子の如く。

僕は初めて会う娘、夏希の後ろを歩き、この世界で僕が住んでいるであろう家へ向かった。
夏希はたまに後ろを見て僕の顔を確認しては
「何で後ろ歩くの？」
などと聞いてくる。
「いや、大きくなったなぁって思ってさ」
「何それ」

この目の前の少女が自分の娘。勿論、そんな実感はない。だけど彼女に着いていくのが、ここでの僕の最大の手掛かりである事は間違い無かった。そう思うと何処か後ろめたく、自分自身がぎこちない動きをしてるんじゃないかと夏希が振り向く度、緊張した。

夏希が角を曲がりスタスタとマンションの中に入っていた。
大きさは五階程度、見た目は並だが入口がオートロックになっていた。
ここに住んでいるのだろう。
センスは悪くない。

「ふむ。」
「ん？」
「いや…え？」
「行こ」
「あ、ああ」
四人も乗れば一杯のエレベーターで二階に行き、左に曲がり角部屋へ。２０３号室。

初めて会う制服姿の女の子。その後ろを歩き、初めて来るマンション。彼女が鍵を開け扉が開く。彼女に続き僕が中へ入る。やはり何処か後ろめたい。心臓が高鳴る。今にも誰かが出てきて突き飛ばされた挙げ句「まんまと騙されやがって」と罵られそうな気がして身構えた。

部屋の中はごく普通のマンション。散らかっても無く、簡素でも無く人の温もりがあり、扉を閉め少し落ち着いた。

玄関に僕と妻の結婚式の写真が飾ってあった。写真を飾るのは昔から恥ずかしく、抵抗があった為、違和感があったのだが、紛れも無く僕と妻が写っていたので気恥ずかしさより先行し、また一つハードルを越えた気になる。まだ間違えていない。

そう、僕はここに住んでいるらしい。

「あ…お母さんは？」

「え？」

「あ？」

夏希の表情が明らかに戸惑い、一瞬曇った様に感じた。が、すぐさまニコッと笑い

「そうね、たまには…」

と言って正面の扉を開け入っていった。

「へ？」

僕は何やら意味が解らず着いていくと、そこはリビングで部屋の片隅に仏壇があり、夏希はロウソクにマッチで火をつけて、線香を近づけた。

僕は仏壇に近づき

「は？」
自分でも驚くぐらい大きな声が出た。
その声にまた僕自身慌て、身体がのけ反った。
「わっ！、何？」
夏希が振り向き僕の顔を見る。
「え？何？」

仏壇には、妻の写真が置かれていた。その写真も随分と若く、結婚当初に撮られた写真だった。

僕は呆然とし、寒気が身体を突き抜けて行った。

「大丈夫？」
夏希の声がした気がした。
「え？何か言った？」
「迷子みたいな顔して」
「え？…」

僕は慌てて顔を摩り、そして止めた。慌ててはいけない。それがルールだ。解っているが、僕の身体が全身で拒否反応を示し、停止した。

何も言葉が出ず、ただただ停止した。何か言わなきゃ疑われる、そう思い前を見た時、既に夏希の姿は無かった。何処かの扉が閉まる音がした。自分の部屋に戻ったのだろう。

僕は目の前にある仏壇の妻の写真を見ながら、泣きたい気分になっていたが、涙は出なかった。それは、何故泣きたいのかすら解らず、人混みの交差点で一人迷子になった児童の如く、突如の別世界に一切の想像が奪われている姿に似ていた。

僕は妻の写真を手にすると窓際にそれを置き、その横に僕も座った。
妻は今日、家へ帰る予定だった。ズングリ男が言っていた。無事に着いたのだろうか？
窓外は夕暮れも過ぎすっかり暗くなっていた。
「今度は僕が迷子だ…早く逢いたい。」
少し若い写真の妻に語りかけながら、ポケットに手を入れると、壊れたボタンが出てきた。
「あ…」
妻から渡されたボタンを眺め、早く買わなきゃな…と思い、自嘲した。

迷子の如く。（後書き）

もう少し続くんです（＜＿＞）

帰って食べよう。

初めて入る「自分の部屋」で朝を向かえた。
目を覚ました時、実際ここは何処なのか判断がつかず混乱したが、暫くして状況を把握するに従い、再び落胆し溜息をついた。この世界にいる事自体もまた夢では無いんだ。
悪夢は続いている。

部屋を出てダイニングに行くと夏希が制服姿で朝食を作っていた。
「あ、おはよー」
「おはよう」
「全然支度してないじゃん。大丈夫？」
「え？うん。」
そう言いながらも次々と朝食が食卓に並べられていく。
ご飯、味噌汁、玉子焼き。
その手際の良さに慣れた感じが伺えた。
夏希は自分のお弁当を詰め終わると
「じゃ、行ってきます」
「え？」
時計を見るとまだ七時半。
「早いね」
「部活の朝練。何度言わせるの」
「何度も聞いたか？」
「いってきまーす」
バタンと閉まるドア。
「…」

僕自身は出勤までまだ時間があった。
ポツンとリビングに座り、テレビを眺める。

テレビを見る限り、僕の周り以外世界はあまり変化は無いようだ。
夏希の部屋の扉が少し開いていた。
興味も重なり扉を開け中に入ってみる。入ってみて緊張し、軽く後悔した。いくら自分の娘とはいえ、思春期の少女の部屋。温もりがあり、気持ちが漂い、胸に秘めた約束の欠片があった。
罪悪感を感じ、慌てて部屋を出た。

自分の部屋のタンスを開けてみる。あまり見ない服。違和感。娘と歩く時にあまり恥ずかしいと思わせない為なのか、比較的シックで高価な服が揃えてあった。
そうであっても、僕自身である事は変わらず、さほど居心地の悪い事は無く、それがまた動揺を誘った。
慣れてはいけない。

実際、自分の居心地なんて慣れでしかないのかもしれない。
居場所があり、生活があり、必要とされていた場合腰は重くなる。

僕は会社に出勤して、タイムカードを押すと、得意先周りという事で仕事をサボる事にした。
ここに慣れる事が目的ではなく、一刻も早く戻る術を探し出さなくてはならない。
自分の正しい居場所へ戻り、積み重ねて獲得した僕の世界へ。

僕はオバケが消えたあの高台へ行ってみる事にした。高台にはまだあの日の余韻として釣竿が転がっていた。
実際に起きた事なんだ。

「実際に起きた事なんだ…」
僕は口に出して呟き、確かめた。

ドーナツを買ってきて、釣りをしてみる事にした。
オバケがそうしていた様に。

空が高く、雲が遠くへ広がり、風が緩やかに頬を過ぎる。
音もなく草が揺れ、ドーナツも揺れた。

時間だけが過ぎ、静かな時間が重なる程、今の状態が不自然で混乱した。そして途方に暮れ、ただただ孤独だった。
「……」

会社を定時で上がり、何処にも寄らずに部屋に戻った。
どうしたら良いのか？それが正直な感想だった。僕は妻の写真を仏壇から持ち出し、
ダイニングの机の上に置き、眺めた。
妻は若く、笑顔だった。不在がまだ信じられない。僕は溜息をつき、
「何をやってるんだかね…」
と、写真に愚痴を漏らした。

鍵を回す音がして、扉が開いた。
「ただいまー」
夏希が帰ってきた。
「あ、おかえり」
バタバタと足音が近づき、ダイニングに顔を出す夏希。
「早いね」
「え、うん。残業無かったんだ今日」

「そう。」
「あ…」
「え？」
夏希は机の上の妻の写真に気づいた様で、僕は何だか取り繕う様な声で
「あ、ちょっと話しかけてた」
と答えた。
「なにそれ、大丈夫？」
「え、うん。大丈夫」
夏希は少しぎこちない笑みを浮かべると部屋へ戻っていった。

夏希の表情が眼の奥に残り、少し動揺した。
正直に打ち明けたほうが良いのだろうか？
もし、僕自身の態度や振る舞いが彼女を傷つけている事になったとしたらと不安が過ぎる。
そんな事はしたくない。彼女は僕の娘で、何より…とてもいい子だから。

夕飯の後、リビングでマットを枕にし、ラフな体制で雑誌を読んでいる夏希をチラチラ見ながら僕は正直に打ち明けようかとまだ悩んでいた。

そう思い、緊張し、夏希を眺めると息が苦しくなる。
視線に気づき夏希がこちらを見ると、僕は怯え、目を逸らす。その動きが不自然じゃないかとまた緊張する。今度は緊張が見透かされているようで落ち着かなくなり、立ち上がりウロウロしては目線が合い、逸らす…。
「…ん？」

「ん？どうした？」
「何か言いたいの？」
「え、イヤ…」
「そう…」
「あ、いや、ちょっとブラブラしない？」

薄明かりの街灯の下を二人でブラブラと歩く。
風が心地いい。月が高い。雲が静かに流れている。
夏希の後ろを歩き、彼女の背中を眺める。
彼女は本当に素敵に育っている。奇跡的だ。

そう思えば思う程、何か、酷く残酷な事をこれからするような気分になり、自信が持てずまた迷った。

ドーナツショップでドーナツを買った。楽しげにドーナツを選ぶ夏希の表情が、僕を幸せにする。

そこからまた引き返す。
結局、どう切り出して良いのか解らず無言が続いた。正直である必要はあるのだろうかと考えはじめていた矢先、口を開いたのは夏希だった。
「ねえ…」
「え、…ん？」
「お父さん。寂しい？」
「え？」
「…最近、迷子みたいな顔してる。時々。」
「そうかなぁ…」
「…お母さん」
「ん？」

「どんな人だった？」
「え？お母さん？」
夏希はフーっと一呼吸すると、真剣に僕の顔を見つめた。
僕はその表情に胸が掻き毟られる様な感情がザワザワと過ぎるのを感じた。
「会いたい？」
僕はあまり深く考えず
「んーまぁ、そうだなぁ…会いたいね。」
そう答えた後、空気のざわめきを感じ、夏希から精気が失われた。
「ゴメンね…私が生まれたから…ゴメンね」
「え？…え？どういう事？」
「ゴメンねお父さん」
夏希の手から離れドーナツの入った紙袋が地面へ落ちた。

夏希は、どうしていいか解らず立ち尽くしたまま、ボロボロと涙をこぼし、その涙を一生懸命拭おうとするが、止まらず、それが次から次へ涙以上に早さで彼女の感情を掻き乱しているのが解った。

僕はビックリして、慰めたいと思うのだけれども、一瞬の躊躇が過ぎる。僕は彼女の事をまだ知らな過ぎる。が、戸惑っている場合じゃないのは僕にだって解る。僕は彼女の肩を掴み、自分の方へ向かせ、ギュッと抱きしめた。

夏希が僕の胸でヒクヒクと震えているのが解る。キャシャな身体全身から悲しみが漂っていた。
「いつもいつも恐いの。私のせいで、色々な事がうまく行かないんじゃないかって」
「大丈夫、そんな事無いから」
「私のせいでゴメンなさい！ゴメンなさい！」
僕は夏希の肩を掴み僕の方へ向かせた。夏希は目を逸らそうとしたが

「夏希っ！」
夏希は僕の顔を見た。
「夏希は悪くない。」
僕が小さく頷く。
それを確認し、夏希は口元から小さく笑みを浮かべコクンと頷いた。
僕は地面に落ちたドーナツを拾うと
「帰って食べよう。二人で」
と言った。

翌日も出来るだけ早く営業を済ませるとまた高台へ向かった。
ドーナツの先端をボケーッと眺めながら、昨日の夏希の事が過ぎった。
この世界では妻が自分の命と引き換えに夏希を産んでいた事を知った。僕の部屋に日記があり、当時の僕は心を痛め、混乱し、途方に暮れていた。この世界でもまた複雑に時間は流れている。僕の都合だけで時間は進まない。

と、後ろから声がした。
「釣れますか？」
昨日も何人かが僕を見てクスクス笑っていったが、実際声に出され馬鹿にされると落ち込む。
オバケもそんな気分を味わっていたのだろうか。
「釣れますか？」
次第に声が大きくなり振り向くと…そこに立っていたのは
「大場さん…」
オバケだった。

帰って食べよう。（後書き）

つづく…。

実感、覚悟。

「あの…大場さん…ですか？」
「へ？」
目の前の男は、何を言ってるんだと言うような表情を浮かべ、僕を見る。
別人なのだろうか？
「…すみません」
と言い、頭を下げると、男はニヤリとした。
「まさか、こっちの世界にまでドーナツの営業じゃねえよな？」
「やっぱりっ！」
「どうだ頭がおかしくなった気分は？」
オバケは僕の横に来きて座り、袋からドーナツを取り出した。
「良いか？」
「はい、どうぞ」

オバケは血色も良く、若干太った様に見えた。
それは、髪型が短髪になってサッパリしたから、そう感じたのかもしれない。

「いや、もう…つまり、大場様が言っていた元の世界って事なんですよね？」
「あんたにとっては別世界だろうがな」
と言って笑った。
オバケのドーナツを食べる姿を見ていたら、突然、今の自分の状況がジワジワと実感が湧いてきた。
「どうして良いか…正直…」
「俺の事、ただの変人だと思ってただろう？」
「いやいやいや、でも、実際この世界でも僕の居場所と言うか、生

活がありますので、自分の方がおかしいんじゃないかって考えたりしますよ。」
「どんな変化があった？」
「妻が亡くなっている事になっています。それと引き換えと言ったら何ですが、娘が存在します。元の世界には存在しなかった。…実際、私達に子供が出来かけた事はあったのですが、妻の命に関わると聞かされ諦めた過去があります。」
「実際そうなっていたかもしれない世界って訳だなここは」
「どうも、私は娘の事を考え、少しセキュリティーのしっかりしたマンションに住んでいます。」
オバケはそこまで聞くと、釣竿の先のドーナツに目をやった。

「俺はな…ずっとここに座って考えてた。三年だ。毎日毎日気力をもたせようったってさすがに辛い日もある。本当にただ俺の頭がおかしいんじゃないかと何度も考えた。あの世界で何か新しい事を始めたって誰も何も言わないだろう…だが俺は、決意と可能性に賭けた。覚悟が無い奴は結局何処にも辿り着けん。あれもこれもって訳にはいかないんだ。」
「はい。」
「今ここにいる意味を考えるんだ。意味の無いものなど存在しない。ただ見過ごしているだけだ、解るか？」
「この世界の意味…ですか。」
「俺は何とかここへ辿り着いた。あの日、ガキの遊び半分に殺されかけたからか、もしかしたらあんたに出会ったからかもしれない…何でもない日常だがな、すごく幸せだ。」
「そうですか。良かった。」
僕は心からそう思えた。
オバケは雨の日も、夏も冬も、奥さんとドーナツを食べなかった事を後悔し、もとの世界に戻れる確証も無いまま、不安と絶望を感じながら、ここへ座り続けた。頭がおかしいと笑われながら。

実際、まだ僕はこの状況を把握できていないのかもしれない。事態を深刻に飲み込もうとするのを何処か拒否しているかのように。それはオバケが言う、覚悟がまだ出来ていないからなのかもしれない。
「で、どうだ？」
「はい？」
「娘と逢えた気分は？」
「いや…あまりにも唐突なので、実際何が何だか…」
「お前さんも逢いたかったんじゃないのか？自分の娘に」
「…え、いや、考えてもいなかったので」
オバケは軽く微笑み
「じゃ、考えるんだな」
「はい」
「俺が言えるのは、取りあえずドーナツの独り占めはいけないって事だ」
そういって笑った。
僕も笑った。
僕はオバケに昨夜の事を話した。夏希の事。涙、戸惑い。父親とは。
「ほぼ初対面の女の子に愛してるかって聞かれてるようなもんだもんな」
「ええ、でも彼女にとって僕は紛れも無い父親でして…自分の事ばかり考えて気づきませんでした。」
「あんたにとっては別世界でも、ここでも必死に人は生きてる。」
「ええ、そして私の娘が苦しんでいるんです。」
私の娘。そう自分で言って、少し胸がキュンと痛くなった。そう、夏希は僕の娘なのだ。僕に実感、覚悟があろうが無かろうが。
「真面目だねー。そのうちこっちの世界にどっぷり根付くんじゃねえのか？」
「どうしたら良いんでしょう？」

「んな事は自分で考えろよ。」
「一つ質問なんですが、私がこっちにいる間、あちらの世界はどうなっているんですかね？」
「んー、取りあえず俺は変化した当日に戻った。慌てて妻とドーナツ食ったよ。元に戻る為の三年の服役だ。」
僕は何年になるのか？
「実際、俺があんたにあったのも三年前だ。あんたは変わらんなって、あたり前か。俺は今でもたまにここに来てしまう。色々あるとな。」
つまり、オバケは三年前のこの世界に戻り、僕と時間差が出来ている。少し太ったと感じたのもそのせいかもしれない。

「…何だか気が狂いそうです。」
「実際、気が狂ってんだ。この世界ではな」
僕は体中に現実味を浴び、混乱の足音が近づいてくるのを感じた。
と、唐突にバシッと背中を叩かれた。
「いてっ！」
「じゃ、行くわ。」
「あ、すみません」
「あんたの歩き方一つで世界が変わる。それをまず、あんたが信じなきゃな」
「あ、ありがとうございます！」
オバケの背中を眺める。
ドーナツが揺れる。
「三年か…」

僕は途方にくれ、寝転がった。空は高く、今日もゆっくりと雲が流れていた。
「適当な雲をジッと見つめ「消えろ」と頭で念じると、曇って消えるのよ」と昔妻が言っていた。僕はそれを思い出し、雲を眺め念じ

てみた。「消えろ」

携帯の着信音を耳にして、目を覚ます。

眠ってしまったらしい。僕は慌てて電話に出た。

電話は学校からだった。

「夏希さんが学校にいないのですが…」

実感、覚悟。（後書き）

もうすぐクライマックスです！

ドーナツと彼女の欠片。

夏希が学校にいない。
学校から電話をもらい僕は「あ、あのどうしたら？」と、何とも情けない問い掛けをしていた。電話口で先生らしき、か細い声の男性は「え～、一応、こう言う流れになっておりまして、その後の判断はそちらにお任せすると言う事に…」
つまりは学校としては報告義務を果たした時点で責任はこちらに移譲したと言いたいらしい。
「解りました。御迷惑をおかけしまして申し訳ございません。」
電話を切った後、僕は暫く立ち尽くした。
何かしないといけないのは解るが、それが思い浮かばない。
いったいどうしたら良いのか？
一瞬、何処かで「関係ない」と思ってる自分を感じ、腹が立った。
彼女の親は僕だけなのだ。
とにかく動かない事には。

僕は夏希を探しに、衝動に任せ走り出す。
走って走って走って…息が切れ、呼吸が乱れ、立ち止まり、肩で息を整える。身体を起こし、立ち尽くす。
「ハアハアハアハア…」
空回り、無力感、滑稽である事は自分でも解った。

どうしたら？何処を探せば。僕は何をしているのか？
「覚悟を持て」オバケの言葉が過ぎった。
いつまでも迷っているわけには行かないんだ。
言い訳をして、逃げ続けるわけにもいかない。覚悟を持て！
呼吸の乱れを整えると僕はまた走り出した。

とにかく家へ戻る事にした。
家に帰っていると言うのは当然考えられる選択肢の一つだ。

タクシーに乗り、急いで家へ戻る。
マンションに着き、　タクシーを降りると、

「すみません」
と、声がした。最初、自分に向けられた言葉とは気付かず、マンションに入ろうとした時、僕に立ち塞がる様に、人影が現れた。そこには幼さの残る坊主頭のブレザーを着た高校生の少年が立っていた。
「夏希さんのお父さん…ですよね。前に一度。」
と言われ、見覚え無いなと過ぎった後、今の状況を思い出す。たぶん、この世界の僕は前に彼と会っているらしい。
「君は？」
「すみません、夏希さんが心配で…」
彼は頭の中で何度も言うべき事を反芻したのであろう、言葉は少し焦り気味で、緊張が伝わる。

「夏希さんが悩んでるんです。」
少年は真っすぐな目で僕に訴えた。

少年は夏希に誘われて学校を抜け出したと言った。「僕はもうそろそろ戻ろうって言ったんです」でも夏希には目的があるらしかった。
「夏希さんは自分の存在しない世界に行くと言っていたんです。」

自分の存在しない世界？

夏希はいつも寂しそうだった。少年はいつも何とかしようと思うのだが、その距離がどうしても埋まらない。それは父親とうまく行ってないからじゃないかと彼は思ったようだった。

「夏希さんとしっかり向き合ってください！」
彼は彼なりに真剣なのが解った。高校生の自分に出来る精一杯の気持ちを不器用に僕へぶつけているのが解る。きっと僕が戻るまで夜になろうが待っていた事だろう。
そして夏希の事が好きなのだろう。
僕は少し胸が熱くなった。

「で、夏希は何処に？」
「廃工場裏の階段です。」
「階段？」
僕は少年にお礼を言い、言葉を頼りにその工場へと走って向かった。
向かってる最中、あの少年を思い出し、夏希の青春が僕の身体に染みていくのを感じた。

工場は海沿いの防波堤の下にあり、ほとんど人気の無い場所にあった。
工場が見え、近づいていくと工場脇の階段を数段登っては飛び降り、登っては飛び降りる人影が見えた。

「ハアハアハア…夏希！」
僕は呼吸混じりで精一杯の声を出し、呼び掛ける。
「お、お父さん…」
「帰ろう。夏希」
そう言って階段を登ろうと手摺りに手をかけると、
「いや、ダメ！」
「何で？どうしたの？」
「だってお父さんじゃないもん！」
お父さんじゃない？

「何言ってんだよ？」
「私のせいだもん！私のせい！お父さんを帰して！お父さんを返してよ！」
夏希は階段を駆け登り、僕を睨み威嚇する。混乱しているのが解った。
そしてその場に蹲ると、大声で泣きはじめた。
「…夏希」

僕は夏希が下りて来るのを静かに待つことにした。数段下がった階段の下から話しかけ、彼女の気持ちが冷静になるのを待った。
「お父さん…どこか変かな…」
「……」
「ホラ、あれだ。思春期って奴じゃないかな？誰だって世界がうそ臭く見える時期が来るんだ。それだよ。お父さんにもあったぞ。」
「……」

夏希は顔を伏せ座ったまま。僕は空を眺め、ゆったりと流れる雲を目で追った。

「僕もよく解らないんだ。」
「……」
「正直な話、ホラこうやってお父さんになってたりする訳でね…でも実際ただただ押し上げられて歳とって…たいした自覚も無いままその立場を求められる訳で…いや、それが嫌とかそういう事で無くて…色々な偶然や可能性がたまたま重なって今があるのは間違いないんだ。僕達が逢えたのも。」
僕は訳も解らずベラベラと口が滑る。ただ正直にならないといけない。そんな気持ちを抱え、

「いつの時代も子供は逃げて、大人は迷う。でもね、その時は大人も子供も自分では探していると思っているんだ。…そんなに変わらないんだ。」

夏希が顔を上げ、僕の方を見た。
その表情は寂しげで、それはきっと僕のせいだった。

僕は立ち上がり、階段を登り、ゆっくりと夏希に近づく。そして覚悟を胸に、
「俺はお前の味方だ。どんな事があっても」
と言った。
「え？」
「生きていこう！出来るだけ元気に、出来るだけ笑顔で」
夏希は暫く僕の顔をポカンと眺め、顔を伏せる。
「フフ…フフフ…」
肩が振るえ、含み笑い、そのうちゲラゲラと笑い出す夏希。
「何だよ。恥ずかしいなー。」
「フフ…違うの。」
「ん？」
「良かった…いつものお父さんだ」
そう言ってニコリと笑った。
「そうか…俺はいつもこんななんだ…」
「ん？」
「いや」
こっちの世界の僕も、この夏希と真剣に向き合い、悩んでいるのだろう。

暫くして夏希は、ゆっくり立ち上がると、軽く微笑み小さな声で話し出した。

「小さい頃、ここでね。この階段から落ちた事があるの」
「ここで？」
「お父さんと一緒にいてね。」
「一緒？」
「落ちたから泣くでしょ。でもいつまで経ってもお父さん来ないの。それどころか、顔を上げたらここの場所ですら無くて…知らない場所で泣いてるの私」
「なにそれ？」
「すごく不安になって、ワンワン泣きながら私、お父さん探し回ったの。大声でおとうさーん！って。そしたら何見たと思う？」
「え、何？」
「お父さん。」
「いたんだ」
「違うの。お父さんなんだけど…お父さんじゃないの。」
「どういう事？」
「私を迷子と思って、どうしたの？お父さんとお母さんはどこって…スーツ着たお父さんが。優しいんだけど…いつも私を見る目と違って…他人を見るような…」
それはもしかしたら、僕のいた世界。つまり僕自身なのかもしれないと思った。
「私、恐くなって、またワンワン泣いて、そのお父さんに連れられて交番に届けられてね…で、お父さん行っちゃったから、私慌てて追いかけたの。そしたら…何を見たと思う？」
「え、何？」
「お父さん。」
「へ？」
「今度は本当のお父さんだったの。何処行ってたんだって凄く怒られた。私、うまく説明出来なくて、ワンワン泣いて…」
「……」

「あの時の違うお父さんの目…私を見る目…最近、お父さんそう言う目をしてたの…」
夏希は別の世界に行った事がある。そこに本当の父親が行ってしまったのではないかと、小さい頃ここで起きた事を再現しようとしたのだろう。

僕は、夏希の話を聞き、全て打ち明けようと決心した。今の自分はここの世界の人間ではなく、きっと小さい頃あったのは、僕だと…。その方がより近づける気がした。
「夏希、話したい事が…」
そう言いかけた時、携帯が鳴った。
「ん？」
「学校？」
いや、その番号は…妻からだ！

僕は慌てて電話に出て
「今何処？」
「今ね、うちに帰ろうとしたんだけど、違う人が住んでるの…何？いったい」
それはきっと元の世界で僕達が住んでいた場所に妻が行ったからだ。つまり、妻はこっちの世界にいる！
僕は一瞬でその事を理解する。

「え…うん、ちょちょ、そこにいて！今そっちへ行くから！」
「あ…」
「え？」
「何か…変な人が寄ってくる…怪しいよ」
「え？何？」
「また電話する」
電話が切れた。

「どうしたの？」
「行かなきゃ！」
「え？」
「お母さんに会えるぞ！」
「は？」
僕は、取りあえず学校へ戻るように夏希に言った。説明は後ですると伝え。

妻のいるらしき、元の世界のアパートへ向かった。
急がなきゃ！しかしどういうことなんだ？
僕はまた息を切らせながらゼエゼエ走る。妻は怪しい人が寄ってくると言って電話を切った。
解りやすいぐらい、危ない状況だと僕にだって解った。そして、早く逢いに行かないと一生逢えないんじゃないかと頭を過ぎる。

目の前から走ってくる自転車の前に立ちふさがり、止め、
「なんだあんたっ！」
「その自転車…これで…これで…」
財布からありったけのお金を出し、僕は自転車を手に入れた。
「あんた正気かよ？」

自転車で突っ走る！
「うりゃゃぁぁぁっっっっっ！！！！！」
足が千切れるんじゃないか、鼓動が耳を塞ぐ、視界がぼやける。
そろそろアパートに近づいて来ると、「誰かっ！」と叫ぶ妻の声が聞こえた気がして、自転車を止めた。
坂道に目をやると…妻だ。必死で走ってる。その後ろを誰かが追いかけてくる！

僕は自転車で、その坂道へ向かい、ペダルを踏み、登ったっ！
「何なんですかいったい！」
「今、説明しますから、待ってくださいよーっっ！」
そんなやり取りの声が次第に聞こえてくる
「待ちやがれこらーッッッ！」
「あなた！」
僕は妻の間に割り込むように自転車を止め、迫ってくる男を威嚇する
「え？」
その男は…ズングリ男だった。僕に妻が戻ってくるまで何もするなと言ったあのズングリ男だ。
「あんた！あの時の？」
「あ…安藤さん？！」
「へ？」
「え？」

僕達三人はアパート近くの公園へ行き、ズングリ男の話しを聞く事にした。
「安藤さんがここにいると言う事は…大体の事はご存知と言う事でしょうか？」
「いや、さっぱり…」
「この世界のズレの事は？」
「それは多少…」
妻が目をパチクリさせ「なになに？」と聞いてくる。
「安藤さんもお解かりだと思いますが、私も下請けの立場でして、あまり込み入った事を伝える事は出来ないのですが…私の仕事はまあ、簡単に言えば世界のズレの様な物を静かに、ささやかに、気づかれる事無く修整する事でして…まあ、アブラムシの油、よだれに反射する光、ウンコの湯気みたいな物でして…大した者じゃないんです。本当に。そんなウンコの湯気にもですね、それなりに役割が

あるわけですよ。…ええ。」
「全く意味が…」
「ああ…すみません。つまり私の元請からの守秘義務が…その、奥様に至っては、ほんの絡まった糸を解くように…ちょっとお時間を頂いた訳でして…」
「え？私？」
「ちょっとしたミスでこちらの世界へ」
僕は妻に聞いてみる
「何してたの今まで」
「ああ、頼まれて看病したそのオバサンが沼津に行っちゃって、迎えに行ったらまた何処かいっちゃって…探し回っているうちに電話が繋がらないだの、おばさんなんか知らないと言い出す旅館の人がいるは、何が何だか…本当に世話しなかったの。まあ無事に戻ったんだけどね」
と、その話を聞いていたズングリ男
「えー…言いません？」
「はい？」
「あの、本来おば様はいなくなってはいなかったんです。」
「ん？」
「私の役割はおば様がお家を抜け出し事故に遭われる世界の修整として、奥様におば様を見つけて頂くという…おば様を無事家に戻して頂いた後、　よき所でまた元の世界へ…と言う…」
妻は「意味解らない」と
「いや、もう、それで。その方が私にとっても…ウンコの湯気ですから…風に舞ったフケ、夕暮れ時の残尿、水虫のカスだと思って頂けたら」
「つまり…失敗しちゃったんですね。色々と…」
「ええ…まぁ…それで奥様をあっちこっちと振り回してしまい…」
「失礼ですが下請けという事ですよね？」
「はい。搾取され搾取されの日々で御座います。」

僕はニヤリと微笑んだ。
下請けの気持ちは僕もよく解る。
「下手したらあなたもクビを切られるかもしれない…あれですよね、結局下請けの下請けだと、失敗したらすぐ次に取り替えられ、意見もろくに言えず、仕事ばかり追加され…」
「ええ、おっしゃる通りで御座います…なので出来れば…今起こっている沢山の事はどうか御内密と言うか…忘れていただけたら…」
「解りました。」
「ありがとう御座いますっ！」
「その代わり…一つだけ目をつぶって欲しい事があるのですが…それを済ませたら元の世界へスライドして頂いて結構ですので」
「目をつぶる？」
「ええ」妻が僕の横でポカンとしていた。
僕は妻を見て、ニッコリと微笑んだ。

オバケが釣りをしていた高台に僕は妻と佇んでいる。
暫くして夏希が近づいてくる。
緊張している夏希。
僕は夏希に声をかけ、
「持ってきた？」
夏希はニコッと笑いドーナツの入った袋を掲げる。
僕はそれを見てニンマリと笑う。
妻はまだ状況を受け入れるのに時間がかかっている様な表情を浮かべている。
夏希も妻を見つめ、立ち止まる。そして、深々とお辞儀をした。
妻は、その丁寧な夏希を見て、微笑む。
夏希、その妻の表情を見て、一気に溢れ出した気持ちに背中を押さ

れ、妻の下へ駆け寄りギュッと抱きつく。妻は受け止め、優しく包み込んだ。
夏希は妻の胸で声をあげて泣いていた。
僕も自然と涙が出ていた。

草の上に座り三人でドーナツを食べた。
夏希が妻に聞く
「赤ちゃん産めなかった時…悲しかった？」
「うん。悲しかった。とっても…」
「赤ちゃん…欲しかった？」
「勿論。で、その子は一日でも長く幸せを探すの」
夏希、ハッとした表情の後、力強く、頷いた。
僕はドーナツを食べ
「コーヒーも欲しかったな」
と言った。二人が笑った。
僕も笑った。

僕達三人は大の字になり目をつぶる。
風が一度強く通り過ぎた気がした。草の匂いがした。
目を開けて体を起こす。
そこにもう夏希の姿は無い。ポケットの中に違和感を感じ、探ると、妻の壊れたボタンが夏希の制服のボタンへと変わっていた。彼女の存在…彼女の欠片。
高台の下にズングリ男の姿が見える。
こちらに向かってお辞儀をし、そして歩いていった。
「…」
僕は横で寝ている妻を起こした。
「あ…」

「うん…もう」
「そう…」
妻は夏希の不在に気づくと、静かに涙をこぼした。
僕は残ったドーナツを袋から取り出し妻に渡した。
そして二人、ドーナツを食べた。

ドーナツと彼女の欠片。（後書き）

終わりました。
最後まで読んでくださった方いましたら、本当にありがとうございました。

このお話は今年3月に書き終えた脚本が元になっています。
小説という事で随分と大きな部分、細かい部分を変更しました。
重要人物を丸々削除したり、一人称で書きはじめてしまったので夏希の駆け落ち話も丸々削除しました。

きっかけは、ここで短編小説を何本か書いていて、次に撮る映画を模索していたのですが、なんともこの「ドーナツと彼女の欠片」じゃないなと思い、でもせっかくだからとこう言う形で発表させていただきました。

意外と時間がかかってしまい、そして連載だと途中何度も直したくなる衝動に駆られ、時に落ち込み…下手くそだなあと。
もっと上手く書けたらと。

ありがとうございました！
これからも頑張ります。
また読みに来てくれると嬉しいです。

それでは。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5483w/

ドーナツと彼女の欠片。

2011年11月21日20時53分発行